保育者養成課程の学生と子どもとの保育現場における虫を通じた関わり：幼稚園教育要領「環境」の視点から

亀井　美弥子 [a]

[a] 湘北短期大学保育学科

【抄録】

領域「環境」の目的に照らして虫を題材にした保育活動を有意義なものとして行うためには、保育者自身が自然に関する体験や知識を豊富に持っているとともに、これらの体験や知識を用いて、子どもたちの自然に対する関心に気づき、それを探求心や理解へと導くための教育的構えや技術を身につける必要がある。そのためには実際の保育現場で子どもと自然との関わりに関与し、そこでの学びを得る必要があるだろう。そこで、本研究では保育者養成課程の学生が保育現場で虫を通じた子どもとの関わりをどのように体験し、その体験に対してどのように考え・感じているのかについての予備的な調査を行った。その結果、(1) 虫が、子どもたちが生き物を学ぶ非常に身近な素材であり、学生にとっても教育内容を理解するために頻繁に利用できる素材となりうること、(2) 虫の生態や特性が、年齢ごとの関わりの頻度や関わり方の種類に影響すること、(3) 虫を通じて子どもと関わることで学生は、「子どもの内的感情を推しはかる」「子どもを客観的な対象としてとらえ直す」「子どもの学びや理解を推測する」「保育者としての姿勢について鑑みる」など、多くの保育者としての学びにつながる体験ができることの 3 点を明らかにし、今後の研究の指針とした。

【キーワード】

保育現場　領域「環境」 虫　保育者としての学び

1. 問題と目的

教育基本法における達成目標のひとつである「生命を尊び、自然を大切にし、環境の保全に寄与する態度を養うこと。」の方針のもと、平成 29 年度に告示された幼稚園教育要領でも領域「環境」の「ねらい」には「(1) 自然な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。」が第一の項目として掲げられている。また、その「内容」においても「(1) 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。」「(3) 季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。」「(4) 自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ。」「(5) 身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。」など、実に内容 12 項目のうち 4 項目が、実体験のなかでの自然や動植物との関わり、その過程における関心の芽生えや気付きを掲げている（文部科学省,

＜連絡先＞

亀井 美弥子　m-kamei@shohoku.ac.jp

2017)。幼稚園指導要領における領域「環境」での「3　内容の取扱い」の記述を振り返るまでもなく、乳幼児が自然との直接の触れ合いを通じて、内的安寧を得たり、豊かな感情、好奇心などを育む中で精神的成長を遂げることは確かであろう。

さて、自然体験を心の豊かさや学びに最大限に生かすために保育者に必要なこととは、何であろうか。ひとつには保育者自身が自然に関する体験や知識を豊富に持っていることが挙げられるだろう。だがそれに加え、保育者は、これらの体験や知識を用いて、子どもたちの自然に関する関心に気づき、その気づきから自然に対する探求心や理解へと導くための教育的な構えや技術を身につけている必要があると考えられる。一般的な日本の幼稚園・認可保育園では、一定の広さの園庭が設置されており、その中で行われる外遊びを通じて、園児たちが砂、水、土、木々や草花、小さな生き物などそのままの自然と触れ合う機会が確保されてきた。これらの自然環境を最大限に利用し、自然に親しみ、科学的な探求心の基礎を育むためにも、保育者養成課程の学生が、自然に関する体験や知識を得たうえで、子どもたちの自然への探求心や理解へと導く術を学ぶことは不可欠だといえる。

本研究では、この問題を考えるにあたって、園庭や散歩などの園外保育で見かける身近な自然に潜む虫の存在に注目した。虫は子どもたちがはじめて触れ合う身近な生物だといえる。たとえば、主に地面に住処を持ち、羽をもたないアリやダンゴムシなどは1歳児クラスの子どもであっても手軽に安全に触れることができる。その活発な動きや体の変化など、生態も興味深いことから、子どもたちにとって引き付けられる生き物であることは間違いないだろう。このように虫は、保育の現場で日常的に現れ、子どもたちの身近におり、教室での飼育も哺乳動物などに比較して容易であるため、自然とのふれあいや命の大切さなどの領域「環境」の内容を伝える大変優れた教材であるといえる。

しかし、その多くを女性が占める保育者養成課程では、虫一般が苦手な学生も少なくない。屋外での保育活動における子どもたちと虫との関わりが密接なことは、保育の現場に出ればすぐに気づくと考えらえるが、筆者の実感ではそのことはあまり意識されずに保育者養成課程に入学してくる学生が多く、領域「環境」の授業においても虫に対する嫌悪感をあからさまに示す学生は珍しくない。実際に先行研究でも保育者養成課程の学生であっても虫への嫌悪感情が見られることが指摘されている（野尻・今井・栗原，2009)。現在、保育者養成課程の学生と虫に関する研究論文として、虫の好悪感情（野尻他 , 2009）や昆虫の知識（渡部・佐藤・大澤，2016)、虫や動物についての嫌悪感情や知識に関する全般的な意識調査（平田・小川，2017）等、虫に対する学生自身の知識や意識・感情に関する研究は見受けられる。しかし、今後、虫を題材にした保育を有意義なものとして行うためには、学生の虫に対する知識を普及させるとともに、子どもたちが虫とどのように関わっているのかに対する理解や虫を通じた子どもたちとの関わりをどのようにとらえるのか、という点についても焦点をあて、検討する必要があるだろう。そこで、本研究では保育者養成課程の学生に対して、保育現場での虫と子どもとの関わりについての意識や、虫を通じた子どもとの関わりの体験およびその理解について、予備的な調査を行うことで今後の研究の指針を得る。

2. 方法

首都圏にある短期大学の保育者養成課程にて、1年生の履修科目である「環境の指導」を受講している学生を対象に質問紙法による調査を行っ

た。回答は匿名で処理されることや成績には何ら影響しないことなどを説明したうえで質問紙を配布し、20 分ほどの記述時間を確保した後に回収した。これにより 60 枚の質問紙を回収した。質問紙の構成は以下のとおりである。

(1)　学年・年齢・性別

(2)　大学に入学後、保育ボランティアや実習のなかで子どもたちと虫との関わりを見た（目撃した）体験の有無

(3)　(2) で有る場合にどのような虫であったか。①アリ　②蝶　③バッタ　④カマキリ　⑤クワガタ・カブトムシ（幼虫含む）⑥ダンゴムシ　⑦トンボ　⑧セミ　⑨クモ　⑩アメンボ　⑪ハチ・ハエ　⑫鈴虫・コオロギ　⑬カイコ　⑭ミノムシ　⑮カイコ・ミノムシ以外の芋虫や毛虫　⑯ミミズ　⑰その他　より選択。

(4)　保育ボランティアや実習のなかで子どもたちと虫を通じた関わり体験の有無

(5)　(4) で有る場合、1) 何歳児と 2) 何の虫で 3) どのような関わりを持ったのか。また、その時に 4) 自分自身はどのようなことを考えたり感じたりしたか、印象に残っているエピソードを 2 つについて記述。

(6)　子どものころ、幼稚園・保育園の活動のなかで虫と関わった体験の有無およびある場合は 1) 何の虫と 2) どのような関わりをしたか 1 つ記述。

(7)　保育園や幼稚園の活動のなかで子どもたちにとって必要な自然体験とは何かについての考えを記述。

以上の質問項目のうち、本研究では目的に鑑みて虫を通じた子どもとの関わりについて把握・検討するため、(1) から (5) について分析をおこなった。

3. 結果と考察

(1)　回答者の属性

60 名の回答者はすべて女性であり、平均年齢は 18.73 歳であった。

(2)　子どもと虫との関わりを目撃した体験の有無

子どもと虫との関わりについて 82% にあたる 49 人が見たところがあると答えた（Figure1）。

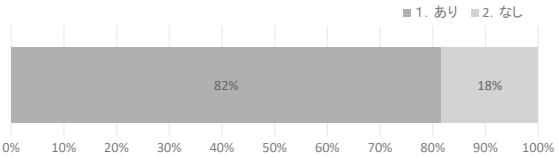

Figure1　子どもと虫との関わりを見たことがあるか

調査を行った保育者養成校では夏休みに 2 週間程度の保育ボランティア参加が教育課程に含まれていることから、そこでの体験をもとに回答をした学生がほとんどであったと推測される。季節柄多く虫が現れる時期でもあり、8 割以上の学生が子どもと虫との関わりを記憶にとどめていた。これは、幼児教育の領域「環境」における「(5) 身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。」という内容を鑑みた時、虫という存在が身近な教材になりうる可能性を示す結果だといえるだろう。

ただ、一方で 5、6 人に 1 人の割合で関わりを見なかったと答えた学生もいた。子どもたちの保育の日常を鑑みると、園庭での自由な外遊びの時間があれば、毎日のように虫と関わる子どもがい

ると推測される。実際にボランティア先の園での虫と子どもとの関わりが実際になかった、あるいは少なかったのか、それとも学生の側の虫と子どもとの関わりに関心が薄いことに起因する結果なのか、さらに検討する必要があるだろう。

(3)　どのような虫との関わりを見たか（虫の種類）

子どもたちが関わっている虫の種類は Figure 2 のような結果になった。関わりを見たと回答のあった虫のなかで多かったのは、アリ（34 人）ダンゴムシ（29 人）セミ（22 人）であった。前述のように今回回答した学生は夏休みに保育ボランティアに参加していることから、セミは季節柄多く関わりを目撃されたと思われる。その他、カマキリ（11 人）、クワガタ・カブトムシ（10 人）、バッタ（9 人）、蝶（8 人）、ハチ・ハエ（8 人）、ミミズ（7 人）などが多く挙げられていた。また、その他で挙げられていたものはカタツムリとトカゲであった。この結果からはアリやダンゴムシなど子どもの目線から近い地面に存在するものは、やはり関わりが多く、学生の目にも触れやすいことがわかる。また、夏に大きな声で鳴き、抜け殻を採集したり遊びに用いたりできるセミも存在感が大きかったようだ。

(4)　保育ボランティアや実習のなかで子どもたちと虫を通じた関わり体験の有無

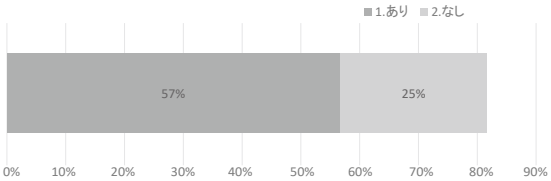

Figure3　子どもと虫を通じた関わりを体験したことがあるか

保育ボランティア・実習中に子どもと虫との関わりを見たとこがあると答えた 49 人中、実際に子どもと虫を通じた関わりを体験した学生は 57% にあたる 34 人であった（Figure3）。

今回の調査に回答した 60 人中 34 人、つまり半数以上が 2 週間の保育ボランティア中に子どもと虫を通じた関わりを体験しているという結果になった。このことは、虫が子どもたちに領域「環境」

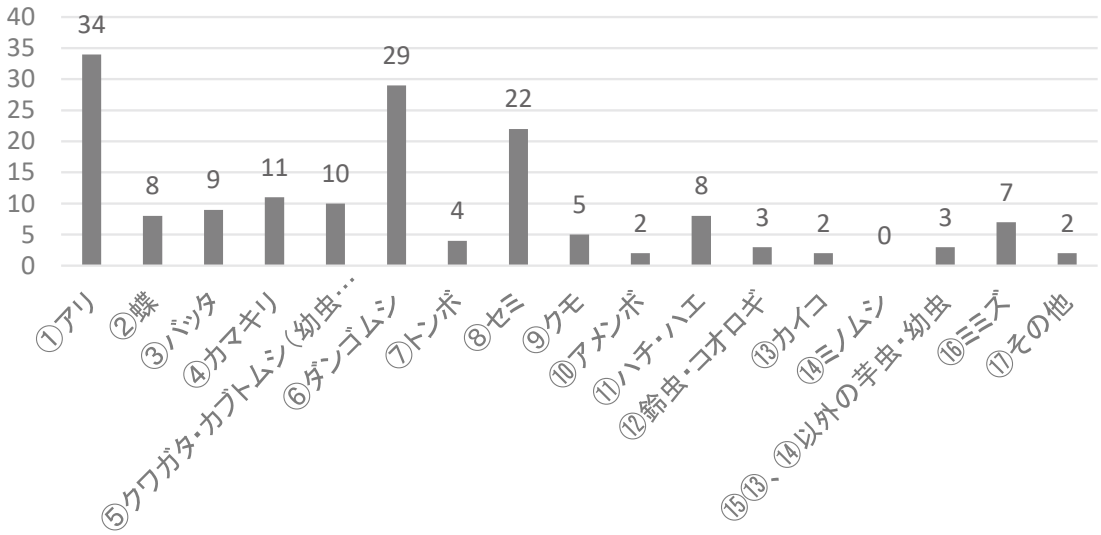

Figure2　どのような虫との関わりを見たか（人数）

における「身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。」という目的の素材になるだけでなく、その教育内容を学ぶ保育者をめざす学生にとっても、教育内容への理解を深めていける保育者としての学びの素材となりうることを示している。

(5)　子どもとの虫を通じた関わりに関するエピソード

実際に子どもと虫を通じた関わりを持ったと答えた34人から、43のエピソードが得られた。43のエピソードを以下のように整理した。

①　子どもの年齢と虫の種類

報告されたエピソードをもとに、子どもの年齢とどのような虫との関わりかについてクロス集計を行った（Table1)。学生が虫を通じた関わりを体験した子どもの年齢は4歳児が最も多く、次いで3歳児、2歳児、5歳児という結果になった。報告された虫の種類としてはダンゴムシ、セミ、アリが多かった。

Table1より低年齢の2歳児、3歳児で、アリやダンゴムシの報告が多く、セミについては4、5歳児との関わりの報告が多いことが読み取れる。また、バッタ、トンボ、チョウなどの跳躍・飛行する虫に関しても3歳以下の報告は1件のみであり、子どもの目線や身体的な能力およびそれに付随する関心が子どもの虫との関わりに影響していることが推測された。

②　どのような関わりをもったか

質問項目（4）の「3）どのような関わりをもったか」の記述を記述内容から分類した。その結果、学生の虫を通じた子どもとの関わりは「共同観察」「子どもから提示」「採取補助」「虫を媒介とした遊び」「虫を媒介とした指導」の大きく4つに分類することができた（Table2)。

次に分類した虫との関わりが園児の年齢や虫の種類とどのような関係をもっているのかを確認するため、「子どもとの虫を通じた関わり」と「子どもの年齢」および「子どもと虫を通じた関わり」と「どのような虫か」のクロス集計を行った。

以下では関わりの内容の分類ごとに、考察を行う（Table3, Table4)。

「共同観察」

共同観察を行ったという報告は11件あった。子どもの年齢は2，3歳児の方が4，5歳児より

Table 1　エピソードで報告された「子どもの年齢」と「虫の種類」のクロス集計

		子どもの年齢				
		2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	総計
虫の種類	アリ	2	4	2		8
	イモムシ			1		1
	カマキリ	1	1		1	3
	クワガタ	1				1
	ケムシ			1		1
	コオロギ	1				1
	コガネムシ			1		1
	セミ	1		5	5	11
	ダンゴムシ	3	5	2		10
	チョウ			2		2
	トンボ				1	1
	バッタ		1		1	2
	ミミズ		1			1
	総計	9	12	14	8	43

Table 2　子どもと虫を通じた関わりの分類

分類名（エピソード数）	定義	記述例
共同観察（11）	学生が子どもと一緒に虫を観察したり、子どもが虫と関わる場面を見たという記述。	・入れ物に入ったダンゴムシを一緒に見て動くのをみた（2歳児）
		・プールで遊んでいた時ちょうちょが近くを飛んでいて一緒に観察した（4歳児）
子どもから提示（10）	学生に対して子どもの方から虫を見せてきたという記述。	・男の子がバケツの中にダンゴムシを入れて見せてきた。「うらになっちゃった！」と言い、私の方に向けてきた。（2歳児）
		・セミの死体をみせてくれた。（4歳児）
採取補助（15）	子どもが虫を捕まえることを手伝ったり、手伝いをお願いされたという記述。	・アリを見つけて「お姉さん捕まえて」と言われました「ちょうだい」と言われたので触りたかったのかなと思いました。（2歳児）
		・外遊びの際、セミってうるさいよねと男の子が行ってきたので「セミって毎日元気に鳴いてて私は好きだよ」というと、気に止まっていたセミを見つけて捕まえようとしましたが逃げられてしまいました。その後死にかけのセミを男の子が触ろうとしたら「ジ！！」と泣いて男の子と笑い合いました。（5歳児）
虫を媒介とした遊び（8）	虫を利用して何らかの遊び行為を行ったのに関わったという記述。	・バケツの中にたくさんの生きているダンゴムシが入っていてそれが料理だと渡された。（3歳児）
		・男子数人がセミの抜け殻を持ってきて、服にくっつけたりくっつけられたりして遊んでいた（4歳児）
虫を媒介とした指導（1）	虫を利用した保育活動に関わったという記述	・コオロギの鳴き声を聞いて一緒に歌った（2歳児）

Table 3 「関わりの種類」と「子どもの年齢」のクロス集計

		子どもの年齢				
		2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	総計
関わりの種類	共同観察	2	5	3	1	11
	採取補助	4	2	5	4	15
	子どもから提示	1	3	4	2	10
	虫を媒介とした指導	1				1
	虫を媒介とした遊び	1	2	2	1	6
総計		9	12	14	8	43

Table 4 「関わりの種類」と「虫の種類」のクロス集計

		虫の種類													
		アリ	イモムシ	カマキリ	クワガタ	ケムシ	コオロギ	コガネムシ	セミ	ダンゴムシ	チョウ	トンボ	バッタ	ミミズ	総計
関わりの種類	共同観察	3		1		1			2	2	1		1		11
	採取補助	5		1					5	2	1	1			15
	子どもから提示		1	1					2	4			1	1	10
	虫を媒介とした指導						1								1
	虫を媒介とした遊び				1			1	2	2					6
	総計	8	1	3	1	1	1	1	11	10	2	1	2	1	43

も多く報告された。これはまだ虫を捕獲する力がないが虫に興味をもっている低年齢の子どもとの関わりを考えると妥当な結果であろう。虫の種類としてはダンゴムシ、セミ、アリが主なものとして挙げられている。

何かを集中して見つめる事それ自体や現象について感じた感情を他者と共有することは、特に低年齢児の発達にとって非常に重要な体験であるといえる。その意味でも虫を一緒に見るという学生の行動は保育活動において重要な関わりであるといえる。この関わりが低年齢児で多く報告されたことは、今後、子どもと虫との関

わりや虫を通じた子どもと保育者との関わりをどのように保育活動に生かしていくかという点で興味深い。

「採取補助」

虫の採取を手伝った体験は15件と一番多く報告された。虫の種類としてはアリ、セミ、ダンゴムシなどのおなじみの虫とともに、その他カマキリ、チョウ、トンボなど比較的捕獲が難しい虫も挙げられた。年齢的にバラつきがあったが、Table1を合わせて考えると、低年齢児ではアリの捕獲、4，5歳児ではセミや飛ぶ虫の捕獲への要請や学生自らの補助があったと推測される。

「子どもから提示」

虫に限らず日々子どもたちは自分の活動や制作物を大人に見てもらうことで、自己の活動への充実感を得、それが自信や成長につながっていると考えられるが、虫についても自分で採取した虫やまたそれを用いた遊びを大人に提示していた。年齢的には3，4歳児が多く、虫の種類ではダンゴムシが多かった。これはダンゴムシの採取のしやすさもさることながら、丸くなる性質などが子どもにとっても興味深く、大人（ここでは学生）とその発見を共有したいという気持ちが推測される。

「虫を媒介とした遊び」

「虫を媒介とした遊び」とは虫をただ採取したり、観察するだけではなく、虫を材料として使った遊びへの関わりを分類した。Table2にあるように、セミの抜け殻を服にくっつけたり、ダンゴムシを採集してそれを料理の材料に見立てる、つまりおままごとの材料として使用するなどが例として挙げられる。虫の種類としてはダンゴムシのように採取が容易で丸まって動かなくなるものやセミの抜け殻、あるいは死骸というように動きがあまりないものという特徴が挙げられるだろう。素材としての利用はある意味、モノとして虫を扱っていると解釈できることからも動きの静止した虫や死骸が対象となっている。

「虫を媒介とした指導」

これは保育活動の中で園の教育指導の一環として虫が活用された場面での学生の関わりである。秋の虫の声が聞かれる季節だったこともあり、コオロギの声を聞くという関わりの報告があった。この1件以外には計画された保育活動における関わりは報告されなかった。

③　どのようなことを考え・感じたか

(4)　4)「自分自身はどのようなことを考えたり感じたりしたか」についての記述は39ケース得られた。39ケースの内容を分類すると「子どもの姿への気づき」「子どもの感情への気づき」「子どもの学びや理解への気づき」「自己の感情（ポジティブ）」「自己の感情（ネガティブ）」「保育者の姿勢への気づき」が含まれていた。1ケースの記述に分類された内容が複数含まれているものもあった（Table5）。

このように分類した考え・感じたことがどれだけ言及されているかを数え、「関わりの種類」とTable5の「考え・感じたこと」の分類結果との関係を検討するためにTable6のように整理を行った。

Table6より、一番多く言及されたのは「子どもの感情への気づき」であった。これは「共同観察」など、特に共同の作業をしていない場合でも、学生が子どもの感情的内面に対して何らかの思いを馳せているという点で注目できる。保育者養成課程に新しく入学してきた学生は、子どもと「遊ぶ」「世話をする」という能動的な関わりを保育の主軸ととらえがちであると考えられるが、虫を通じた関わりの中で子どもと一緒にただ観察を行

い、子どもの感情的な動きを推測するという体験が得られていることを示された。

次に「子ども一般の姿への気づき」が多く言及されていた。これは主に「子どもとは～である」という子ども理解に関する言及であるが、「虫が大好きなんだな」「幼い時は虫のことを触れる子が多い」など、虫に興味をもち採取に夢中になる子どもを、いわば自己とは異なる存在としてとらえているかのような記述が見られた。これらの記述は一見表層的に見えるが、保育者になるためには、子どもをまず客観的に対象化して理解する必要がある。その意味でこれらの言及は子ども理解の第一歩だと捉えられるかもしれない。このように大人が普段あまり関心を示さない虫に対して、強く興味を惹かれる子どもとの関わりが、学生にとっては子どもの特性への関心を喚起するものになっていた。

次に「子どもの学びや理解への気づき」についても言及されていた。これは、子どもの虫という生物への理解や今後の学びにつながるような視点から言及されているものである。「環境」という幼児教育の領域から見た時に、学生が教育的な視点から子どもを理解することが必要となるが、1年生の段階でもそのような視点から子どもの内面を推測する記述が見られた。

「自己の感情（ポジティブ）」「自己の感情（ネガティブ）」については、ネガティブな感情について注目したい。ここでの記述としては Table5

Table 5　どのようなことを考え・感じたか

分類名	定義	記述例
子ども一般の姿への気づき	子どもとはこういうものなのだ、この属性の子どもはこういうものなのだという子どもの姿への理解や気づきについての言及	・男の子=虫と遊ぶというイメージがあり、女のコでも虫に触れたいといった思いがあるのだな、と思いました。
		・子どもたちは虫を見せた時に先生の反応が面白い同じことをやりたくなるし、楽しくなるのだなと思いました。
子どもの感情への気づき	子どもの内面の特に気持ちや感情に関する言及	・触ると丸くなるのをじっと見ていて虫が好きで楽しんでいるのかなと思いました。
		・丸くなる様子が不思議だったみたいで何度も「見ててね！」と言ってつんつんして丸めていた。私にとってもその子と同じように初めての体験だと思ったようで何度も見せてくれたのだと思った。
子どもの学びや理解への気づき	子どもの内面の学びや虫への理解に関する言及	・強く握ってしまうとつぶれちゃうことが理解できていると思った。
		・生き物を大事にしているけれど死んでしまってもわからないのかな、と思いました。
自己の感情（ポジティブ）	自分自身のポジティブな感情についての言及	・セミを捕まえようと一生懸命追いかけている姿が可愛かった。
自己の感情（ネガティブ）	自分自身のネガティブな感情についての言及	・ぞっとしました。
		・とても虫が苦手なのでぞわぞわしました。
保育者の姿勢への気づき	保育者のあるべき姿や保育者として学ぶべきことへの言及	・小さなクワガタだし、2歳さんは力の加減を知らず、クワガタが弱ってきてしまい、そういう時、保育者がクワガタさんにやさしくなでなでしようねと言葉かけが重要だと思った。
		・虫を怖がらない子どもたちとも一緒になって虫に触れて楽しむために、苦手な虫でも触れるようになること、触ると危険な動植物などの知識を身につける必要があると思った。

Table 6 「関わりの種類」ごとにみた各「考え・感じたこと」への言及頻度

	子ども一般の姿への気づき	子どもの感情への気づき	子どもの学びや理解への気づき	自己の感情（ポジティブ）	自己の感情（ネガティブ）	保育者の姿勢への気づき	合計
共同観察	4	8	3	1	2	0	18
子どもから提示	2	4	3	2	2	2	15
採取補助	8	6	5	1	3	2	25
虫を媒介とした遊び	1	1	2	1	1	1	7
虫を媒介とした指導				1			1
合計	15	19	13	6	8	5	66

の記述例のようにただ、自分の感情について言及するのみの記述もあった。しかし、「保育者の姿勢への気づき」の記述例のように、虫が苦手で触れない自分について反省的に振り返り、虫とかかわる努力について触れる学生もいた。

「保育者の姿勢への気づき」に関して触れていたのは記述全体のなかで5つと少ないが、「2歳さんは力の加減を知らず、クワガタが弱ってきてしまい、そういう時、保育者がクワガタさんにやさしくなでなでしようねと言葉かけが重要だと思った」など、どのよう子どもたちに生命としての虫との関わり方を伝えるのか、また自分と子どもとの虫との距離感をどのように克服すべきかなどが見られたことから、子どもと虫の接触場面に関与することで、人工物を利用した活動とは異なる側面から、保育者としての関わり方の気づきを生んでいるように見えた。

4. まとめ

以上、目的に従い、保育者養成課程における学生が保育現場で体験した虫と子どもに関する関わりについて概観した。その結果、(1) 虫が、子どもたちが生き物を学ぶ非常に身近な素材であり、学生にとっても教育内容や保育活動を理解するために頻繁に利用できる素材となりうる。(2) 保育園で子どもが接する虫はその生態や特性によって、関わりの多い子どもの年齢や関わり方が異なる。(3) 虫を通じて子どもと関わることで、学生は、「共同観察によって子どもの内的感情を推しはかる」、「子どもを客観的な対象としてとらえ直す」、「子どもの学びや理解を推測する」、「保育者としての姿勢について鑑みる」など、多くの保育者としての学びにつながる体験ができているということが明らかになった。以上のことから、身近な存在である虫を素材として学生が保育活動の学びを行うことで、虫の知識のみならず、子ども理解の多くの可能性が含まれていることが示唆された。

一方で、やはり虫を通じた関わりに対して嫌悪感を持っている学生や、そもそも子どもの虫との関わりを見たり、虫を通じた子どもとの関わりを経験していない学生もいた。今後、これらの事態に対する調査や学生のこれまでの経験や心情についての分析が必要となるだろう。

最後に、本研究は予備的なものであり、ケース数も少なく、分類も概要を把握する目的から鳥瞰的な分類となった。今後は、虫を通じた子どもとの関わりについてより多くのケース数を集め、虫を通じた保育活動と学生の認識をより詳細に分析することで、虫を通じた保育活動への振り返りや特に領域「環境」に関する保育者としての学びの有効性について検討していく必要があるだろう。

文献

平田豊誠・小川博士（2017）. 幼稚園教諭・保育士志望学生の「虫」と「動物」についての意識調査　仏教大学教育学部学会紀要 , 16, 63-74.

文部科学省・厚生労働省・内閣府（2017）. 平成29年告示 幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領＜原本＞チャイルド本社

野尻裕子・今井邦枝・栗原泰子（2009）. 保育者養成課程学生のムシに対する好悪について川村学園女子大学研究紀要 , 20（2）, 17-25.

渡部美佳・佐藤邦子・大澤力（2016）. 保育者養成課程で学ぶ領域横断型学習に向けた基礎調査―「昆虫」を用いた取り組み―東京家政大学研究紀要 , 56（1）, 167-171.

Relationships between nursery training course students and children through making contact with the insect at nursery schools – from a learning environment perspective in “Course of study for Kindergarten”

Miyako KAMEI

【abstract】

In order to make childcare activities with insects as a subject meaningful in the “Course of study for Kindergarten” learning environment, it is necessary that the childcare provider him/herself possesses abundant experience and knowledge regarding nature, acquires the educational setting and skill to observe children’s concern of nature, and leads them to explore and understand.

We conducted a preliminary survey on the experiences of teacher training course students with children in contact with insects at childcare sites and their opinions and reflections regarding these experiences.

Results revealed that (1) insects are familiar materials for children to learn about living creatures, and, for students, are frequently used materials to understand educational content regarding the environment. (2) The ecology and traits of insects influence the frequency of engagement by age and the type of relationship. (3) By engaging with children through insects, we found that students had various learning experiences as childcare providers. The experiences enable them to infer a child’s internal sentiment, recapture the child in an objective manner, deduce the child’s knowledge and understanding, and consider their attitude as childcare providers.

【key words】

Kindergartens and Nursery schools, Environment, Little creature such as insect and worm, Learning of nursery teachers